

萩原朔太郎記念 水と緑と詩のまち

前橋文学館報

No.30 2009.3



「萩原朔太郎の戦後」

小田 久郎

平成二十年五月十一日、文学館三階ホールにおいて第36回朔太郎忌が開催され、思潮社代表の小田久郎氏による講演が行われました。

「朔太郎の戦後」について

小田久郎です。ご丁寧なご紹介をいただいて恐縮しています。

さてこの壇上に立つまで、というよりここに坐るまで、文学館友の会有志のかたがたをはじめとする合唱とマンドリン演奏、それと朗読とを客席から聴いたのですが、「僕の青年期のすべての歴史は、全く音楽のために空費したやうなものであつた」という朔太郎の有名なことばを思い出すほど、詩と音楽を分け隔てなく考えていた朔太郎のアリバイを音声からも聴きとれたような感じで、朔太郎がこの会場に舞い降りてくる気配すら覚えるほどでした。音楽を詩のことばのリズムに投入させていった朔太郎の、ほかの詩人にはない特質をしかと実感できたようです。

きょうわたしがおしゃべりするテーマは、「朔太郎の戦後」です。朔太郎が亡くなったのは戦中ですが、朔太郎の詩的生命は

そこで幕が引かれたり、「終末」を迎えたりはしない。終戦がきて戦後に切り替わると、歳月をへるほど朔太郎の読者はふえて、その存在はさらに重く大きくなってきた。そうしたモチーフから戦後の朔太郎を考えてみたい、というのがきょうのお話するポイントです。ですが、このところ体調が芳しくなくて、一時間びつちり喋るだけの体力があるかどうか、少し心もとないのです。それからもうひとつお詫びしなければならぬのは、ここ数カ月足腰が痛くて、立ったままではものの五分ぐらいしかしゃべられない。で、横着をきめこむようですが、座ったまま話をさせていただきます。お許しください。

「フランスへ行きたしと思へども」

さて、「朔太郎忌」での講演は、毎回「萩原朔太郎研究会会報」

に掲載されていますので、その都度愛読もし、眼を開かされてきました。昨年の三十五回朔太郎忌にこのホールで開催されたときに講演されたかたは安藤元雄さんで、はじめに

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

ではじまる有名な「旅上」を引き合いに出して、『朔太郎と異国』というテーマを見事な語り口で展開していました。この記録を読むと、朔太郎の「ふらんす」というのは必ずしも現存する「フランス」を指しているのではなく、朔太郎の頭のなかだけに存在する架空の杳か遠い国のことである、ということが説き明かされてくる。さらに朔太郎の名づける「ふらんす」は、「フランス」だけでなくほかの「ヨーロッパの国々」とも無縁で、だいたい朔太郎は海外に出かけたことはない、ということまで明らかになってくる。海外どころではない、東京へ行くのさえ遠い場所に行くぐらいの大仰な気持になっていたそうです。

では朔太郎にとって、かりに「ふらんす」と名指した「異国」とは、どんなところを考えていたのだったか。そういう設問を作ることで日常から遠いもの、永遠といったものに視線をかざす、朔太郎の根本にある詩的特徴を実証的に引き出しているスリリングな朔太郎論でした。

独特の口語自由詩

また昨年第十五回「萩原朔太郎賞」を受賞された伊藤比呂美さんが贈呈式の記念イベントでしゃべった記念講演『とげ抜き』が「前橋文学館報」の二十九号に載っていて、そこでもこの『純情小曲集』のなかに収録されている「旅上」が朔太郎の特徴的な詩のことばのリズムの典型として採りあげられています。そこで伊藤さんはこういつています。

「フランス」が
「ふらんす」と、
ひらがなで書いてある、こ
こがまた好き
でして。この
「ふ」が、ひら
がなで書かれ



るのと、かたかなで書かれるのと、全然「ふ」らしさが違います。そう思いませんか? 「フ」じゃなくて「ふ」ってありますと、こう、ふくよかなおなかのような、人体にどんな近づくような。「ふらんす」っていう国の持っているイメージが、どんな、どんな、人体の、女の肉体の、感じになつてきますね。そんな感じでこの詩を読んでました。

次いで「このリズムには、ほんとうに影響を受けました」といつて、『月に吠える』のなかの「竹」を引き合いに出しています。

光る地面に竹が生え、

青竹が生え、

地下には竹の根が生え、

根がしだいにほそらみ、

根の先より繊毛が生え、

かすかにけぶる繊毛が生え、

かすかにふるへ。

かたき地面に竹が生え、

地上にするどく竹が生え、

まつしぐらに竹が生え、

凍れる節節りんりと、
青空のもとに竹が生え、
竹、竹、竹が生え。

他の詩人にはない朔太郎の詩のリズムの特質をもちに感受できる得難い証拠物件のひとつですので、伊藤さんのこんなことばも引用しておきます。

なんでこんなことが人間にできるんだろうと思うようなリズム。これはもう朔太郎だけ。中也にはなく、賢治にもなく。この畳みかけるような、エ音で終わる、終わりつづける。これですね。そう、あれです。

戦後も戦後、80年代の「女性詩ブーム」で華々しく登場した伊藤さんに、それまでのどの詩人よりも決定的といえる影響を与えた朔太郎は、どう考えたって戦中に亡くなってジ・エンドとなった「過去」の詩人なんかではない。あとでもう一度くりかえすことになると思いますが、いまもまさに「現代詩の渦中の詩人」であり、二十一世紀の現在なお問題を提示して生きつづけている「現役の代表的な詩人」だといったついでに思います。ついでにいいますと、「現代詩手帖」ではいま城戸朱理、野村喜和夫さんをメインキャスターとして、毎回ゲストを呼んで「討

「近代代詩」という企画を準備しています。すでに吉本隆明さんをゲストに招いて、第一回目の「総論」にあたる討議をおこない、誌上に発表しました。そしていよいよこの年末から透谷から白秋、光太郎、賢治、中也とつづく代表的な詩人を十名ほど採り上げて、徹底的な討議をおこなう予定であります。その個別詩人論の第一回目がいわずと知れた朔太郎で、七五調に依存する「新体詩」以後の「近代詩」の理念と方法を根源から改訂して、「口語自由詩」を成立させた朔太郎の新しい意味づけを、松浦寿輝さんをゲストに迎えてさらに解明する手筈になっています。

朔太郎は、歴史的には「口語自由詩」の完成者として定着されています。一口に「口語」の「詩」を書いたといわれていますが、口語にしばらく、単純な「口語」だけの「詩」をめざしたのではない。最初に引用した「旅上」にしても、日常生活で使っているふつうの口語そのままではありません。一行目の「ふらんすへ行きたしと思へども」の「行きたし」「思へども」、二行目の「ふらんすはあまりに遠し」の「遠し」、それからまだ引用していませんでしたが、三行目、四行目の「せめては新しき背広をきて／きままる旅にいでてみる」の「新しき」「きままる」「いでてみる」と、文語まじりのフレーズをまぜあわせて使うことで、びしとした独特の、それまでにないリズムの詩に仕立てあげていることが判ります。それも文語まじりのリズムだけではなく、「フランス」を「ふらんす」と平がなを使うとか、視覚

的にもリズム感を出す工夫をしています。詩のことばの音楽的効果を極めた朔太郎にして達成された「文語まじり」の独自の「口語詩」なんです。こうした独自で徹底した表現を編み出したからこそ、日本旧来の音数律、七五調に依存している「新体詩」の息の根を止めることができたのだと思います。だから「口語自由詩の祖」といっても、朔太郎は単純に時代におもねって口語に依存し、口語を並べただけの詩をめざした、ありきたりな「口語詩人」ではなかったのです。

くりかえしになりますが、朔太郎もおとしで生誕百二十年、今年で没後六十六年たちます。ただ朔太郎の仕事は、決してその生存した五十七年でピリオドを打ち、歴史のなかに定着され埋没されてしまうものではなく、死後六十六年のこんにちでも生命力を漲らせて、いま現代詩の渦中に生きている「その後の詩人たち」と渡りあっている、というふうにいえると思います。

もう少し実証的にいえば、朔太郎が亡くなったのは一九四二年、終戦の三年前です。朔太郎が亡くなった年に生まれた人がいま六十六歳になる勘定だから、朔太郎とつきあうことができる年齢という、十歳も二十歳もそれより先に生まれていなければならぬから、いま八十歳から九十歳ということになる。だから、じかに朔太郎と接したひとは、もう現在ではほとんど生きていると考えていいでしょう。終戦のさい、わたしなどはまだ十四、五歳の中学生でした。それはわたしと同じ昭和五、六年生

まれて、すぐれた朔太郎論をいくつも書いている大岡信さんとか飯島耕一さん、それに第一回目の「萩原朔太郎賞」をもらった谷川俊太郎さんも、朔太郎とは会って当然というような年齢には達していない。だからわたしたち昭和初年代生まれの詩人たちは、年齢的なめぐりあわせからいつて戦前の朔太郎とはじかに話しあう機会はなかった。けれども、残されている作品から激しく、厳しく戦後の朔太郎と「いのちがけ」でつきあわされざるをえなかった。だからこの関係はあくまで「現在形」ですね。「歴史上の詩人」の詩を読み返してみる、といったような悠長なんびりとした「過去形」の向きあい方ではなかった、ということをもう一度くりかえし強調して次へすすみます。

戦後の詩人たちは、どう朔太郎とつきあってきたか

では戦後の心ある詩人は、朔太郎にどう「影響」され、「捕虜」となり、さらにどう「克服」しようとしてきたか。

そのまえに、こう「戦後の朔太郎」の存在ばかりを強調すると「戦前の朔太郎は前橋では有名だったかも知れないが、全国詩壇的にはそれほどではなかったのではないか、生前はさほど評価されず、戦後になってぱっと再評価されたんじゃないか」、と考えがちな読者もいるかも知れませんか。とんでもありませんね。まさか前橋の読者にはいいでしょう。

朔太郎の戦前の歴史は、厳然と記録されております。たとえば朔太郎が亡くなった翌年の九月から昭和十九年の十月の僅か二年の間にあいだに大部な『萩原朔太郎全集』全十二巻が小学館から刊行されています。完結後十ヵ月で日本は敗戦を迎えているのですから、挙国一致、「撃ちてしまん」の全滅寸前に、よくまあ、こんな不要不急な詩の全集が出版されたものだ、と驚くばかりです。それに朔太郎は戦争讃美の詩はほとんど書かなかったから、戦争詩を書いて軍部にかつがれたという一部の愛国詩人たちの便乗型の処遇とは無縁なのです。驚くのはまだ早い。さらに終戦をへて、戦後となり、昭和二十六年（一九五一年）六月に創元社版の「全集」全八巻が刊行されています。まだ戦争によって破壊された印刷、製本機能が十分に復旧せず、用紙事情も切迫したまま、生産機能も販売機能も十分に整わなかった時代に、です。さらに昭和三十四年になると、きちんと校訂をへて、こんにちでもその完璧ぶりが評価されている新潮社版の『萩原朔太郎全集』が、全五巻の大冊本で完成されています。終戦をはさんで二十年足らずのあいだに三回も違った中央の名のある版元から『全集』が刊行された例は、「詩歌の全集」では出版史上空前絶後です。「有名作家」の「有名全集」でさえ、類例がないのではないかと思います。

つまり、戦前の朔太郎の本は、時局をにらみ地方出版してくれて出すといった態のものではなく、大手の東京の出版社か

ら大量に、戦後の日本全土に向けて出版されていたのです。「口語自由詩」の輝かしきリーダーとして、いかに詩壇のみならず文学界全体に君臨していたかが推測できるでしょう。さきほど触れたとおり、「新体詩」から「近代詩」、そして「現代詩」の詩史をひもどかなくとも、朔太郎なくして日本の近、現代の詩の展開は語れないことは、終戦前後の三回にわたるこの「朔太郎全集」の刊行がなによりも実証していると思います。

同じような「現在形」の詩人として、たまたま去年は、中原中也の生誕百年にあたっていて、いろいろな催事が全国的に行われましたし、中也の「現在性」を論じる論文もかなり出しました。中原中也記念館のなかにある中也研究会で出している「中原中也研究」という機関雑誌の最近号に、たまたまわたしは「中原中也の戦後」というエッセイをこの朔太郎と同じモチーフで書かせてもらいました。この号の編集後記に、編集長で『中也断唱』『続中也断唱』という中也をテーマにした歌集を出している歌人の福島泰樹さんが、わたしの論旨をひきあいにしてこんなことを書いています。

詩は、時代という生命体の中で発酵し、代謝を繰り返し
てゆく。したがって啄木も、白秋も、朔太郎も、賢治も、
そして中原中也もいまだその詩は完結してはいないのであ

る。

「いまだその詩は完結してはいない」とは実に見事な現状分析というほかはなく、さらにこのエッセイの結びに鮎川信夫さんのことばをひきあいわたしに結論づけた「かくて中也はこれからも現代詩の渦中の詩人として生きることになる」ということばを引きついで、こ

う強調しています。

〈かくて中也は、これからも「現代詩の渦中」の詩人として生きることになる〉
これは、生誕百年を迎えた詩人へ贈るけだし最大のオマージュであらう。



自分の発言にからんだことを例にひいて恐縮ですが、これがこんにちの戦後詩人たちの、先行詩人に対する対しかた、考えかたの基本なのではなからうかと考えています。

朔太郎をいかに越えるか

そのひとつの証拠物件として、戦後の代表的な詩人のひとり飯島耕一さんの朔太郎論をご紹介します。これは思潮社で出している『現代詩文庫・第Ⅱ期「近代詩人篇」』の一冊『萩原朔太郎詩集』（一九七五年十月刊）に「研究」として収録されたものですが、「いまでもぼくは詩を朔太郎のように、朔太郎の発明したようにしか書けないでいる」と朔太郎と戦後詩人との引きつ引かれつつの緊張関係を喝破したあと、朔太郎の強さ、激しき、偉大さ、をこんなふうに書いています。

新しい詩、革命的な詩とは何かと言うなら、それは朔太郎を超えることではないかと思われる。朔太郎をいかに超えるか、それが新しく来たものの野望でなければならぬ。だがそれは非常に困難である。三木露風の詩と朔太郎の詩の差違ほども、朔太郎とわれわれはかけはなれていない。こう見ると朔太郎についてずっと考えてこなかったのが不思議なことである。ぼくは自分が詩を書きはじめた

頃、つまり第二次大戦後一、三年目に、仙花紙の実に粗末な、だがいまから思うとなつかしい本で朔太郎の『青猫』を読み、ついで図書館から小学館の全集の朔太郎詩集を借り出して『月に吠える』や『氷島』を読み、散文詩を読んだが、それから詩を十数年書いて、いま朔太郎を手にとると、やはり同じように面白く、自分の詩がいかに朔太郎の敷設した鉄道の上にあるかがわかるのである。

これが戦後三十年たった地点での、すぐれた戦後詩人の朔太郎観です。つまり戦後の詩人は、すぐれた詩人であればあるほど、朔太郎が「発明」した詩の前に立たされたのです。朔太郎は、その傑出した詩の手法と思想によつて、同時代では並び立つ担い手に恵まれなかつたといつてもいいでしょう。他の詩人がうらやむ西脇順三郎、三好達治というすぐれたお弟子さんは、朔太郎の詩の真価を誰よりも評価はしてきたが、朔太郎のように詩を書かなかつた。朔太郎が敷いたレールの上を疑問もなく走るといふことはしないで、自分は自分なりの、より適した方向にすすんでいったのです。朔太郎から詩的啓示を受けたが、朔太郎のように詩を書くとはしなかつたんです。

ところが飯島さんの文章によると、明らかにいま自分の詩は「朔太郎の敷設した鉄道の上にある」とし、「朔太郎をいかに超えるか、それが新しく来たものの野望でなければならぬ」と

まで、決意をかくし立てなく表明しているのです。ここでは朔太郎も飯島耕一も、同じ詩的創造の宇宙圏に同棲している。同じ創造の現場でしのぎを削り、生死をかけた戦いにいどんでいるわけです。だから福島泰樹さんがいつているように、こうした関係が持続する限り、まだ朔太郎の詩は「完結していない」し、「現代詩の渦中の詩人として生き」ていることになるわけです。

ここで一九六六年に初版を、一九七二年に増補新版を出した伊藤信吉編『萩原朔太郎研究』（思潮社刊）の目次をみてみたいのです。この本は当時質量ともに最高の朔太郎研究書として世に迎えられましたが、寺田透、吉本隆明さんにはじまる戦後書かれた詩人論は、それぞれの主体をかけて朔太郎に対決していて、発表当時から注目された論考で、いま読んでも「現在形」としての問題提起がなされています。

寺田透 朔太郎管見

吉本隆明 朔太郎の世界

村松剛 晩年の萩原朔太郎

清岡卓行 萩原朔太郎の詩における口語と文語

那珂太郎 朔太郎と暮鳥との関係

大岡信 朔太郎問題

三好豊二郎 萩原朔太郎の思想

鮎川信夫 朔太郎考

窪田般弥 郷愁の詩人・朔太郎

篠田一士 日本への回帰

栗津則雄 抒情の運命

浜沢孝輔 萩原朔太郎論

飯島耕一 詩における自然観の問題

北川透 現代の抒情詩観

* 中桐雅夫 萩原朔太郎論

伊藤信吉 エッセイストとしての業績

* 河上徹太郎 萩原朔太郎研究 1

亀井勝一郎 萩原朔太郎研究 2

山本健吉 萩原朔太郎研究 3

藤原定 萩原朔太郎研究 4

伊藤整 萩原朔太郎研究 5

* 寺田透・那珂太郎・篠田一士

〈座談会〉『月に吠える』と『氷島』の評価をめぐる

それにくらべて、朔太郎と同時代の詩人たちが書いた文章は、巻末の「研究文献目録」を見ても本格的な詩人論は少なく、エッ

セイ風の「人と周辺」に同時代のひとたちの考えかたが示されている程度で、朔太郎との詩観の違いにきちんと対決する、といった強い姿勢のものはそう数多く見当りません。『朔太郎研究』に載っている「人と周辺」にしても同時代の詩人たちの文章は少なくて、室生犀星、谷崎潤一郎、芥川龍之介、辻潤といった同時代の文学者のエッセイと朔太郎の次の世代の金子光晴、丸山薫、草野心平らの名前が散見できる程度です。（目次省略）

ここで特記しておきたいのは、この『研究』の巻頭に収められている伊藤信吉さんの三十五頁にわたる「展望」は「詩的情操について」「詩的生涯について」「詩的道程について」という三節からなる研究で、朔太郎にずっと私淑してきた伊藤さんにしてはじめて為しえた朔太郎の全体像です。戦前はこうしてこうした詩人論、研究、展望が書かれなかったのか、巻末の「文献目録」を見ながら考えさせられました。

西脇順三郎と三好達治

そのところを少し補足します。

さきほど、朔太郎には西脇順三郎と三好達治という類い稀れな弟子がいたことを、ちらつといいました。ここで指摘したいのは、西脇さんも三好さんも普通の師弟関係のように、先生の詩

法をまねることによって詩人になっていった、という道を選ばなかったということです。

西脇さんは新潟県の小千谷の豪農の生まれで、英文学を志し、海外留学を終え、少壮の英文学者として日本に帰ってきました。その帰りの船中で、たまたま萩原朔太郎の『月に吠える』を読んだ、日本語で詩が書けるんだ、と開眼するんですね。それまで日本の言葉は、詩になんかならない、非文学的な言語でどうにもならないと思いこんでいたので、西脇さんは英語で詩を書いていました。それが偶然『月に吠える』を読んだことで詩的運命ががらりと変って、早速朔太郎の門を叩く、というストーリーになるわけです。そのへんのことを西脇さんは実に冷静なタッチでこう書いています。

僕は十八九の時から外国文学を学ぶことを志ざしたので、それがために日本の文学語で書いたものには全然中学の国語読本以上には更に教養がなかった。藤村、上田敏の影響も少しもなかった。日本語で書いた詩に興味を初めて覚えたのは萩原朔太郎のであった。全く子供らしい希望であつたが、十八頃から三十三位まで非常に詩が好きで詩を作つてはいた。それは覚ええない英語で書いたり、仏語で書いたりして努力したが、皆すててしまった。三十三位になつてからようやく萩原流の語法とリズムで書き出した。

僕は萩原から出発した。単に語法を学んだばかりでなく、その詩的態度も奉戴していた。

(「MAISTER 萩原と僕」)

さらに西脇さんには非常に客観的な視点に立つて日本の近代詩の展開を提示したうえで、上田敏と朔太郎をこう位置づけています。

上田敏乃至蒲原有明氏の詩は我国の詩の語法とリズムの伝統的なものとなつた。その語法は文学語である。それに対立して萩原朔太郎さんの詩は驚くべき世界を先ず開拓したのはその語法とリズムの方面であつた。我国の詩の発達史上上田敏の詩風が重大であると等しく萩原朔太郎の詩風も重大なものである。貢献者としての位置は上田敏と萩原朔太郎とは同等なものであると思う。伝統的に見て、今日の日本の詩風を二大別にすれば上田と萩原とである。前から萩原先生の功績を称えることを考えていてそれが出来なかつたことは遠慮もしていたし、生意気になるかとも恐れていたからである。

上田敏と蒲原有明の「詩の技法」は「文学語」だが、朔太郎は在来の文学語によらず、驚くべき「語法とリズム」を開拓し

たという指摘は、この時期にして「さすが！」だと感じざるをえません。

それを承知のうえで西脇さんは、飯島さん風にいえば、「朔太郎の敷設した鉄道」に乗らなかつた。西脇さんは詩人西脇の固有のルールを敷いたのですね。

本当の夢は詩でないが、詩は美しい夢の一つである。詩という夢が僕を救ってくれるか。夢としては救ってくれるかも知れないが、人生哲学としては救ってくれない。

萩原さんは僕の MAISTER である。先生の人生哲学はしかし単に現在の僕の頭には大きすぎる。先生の哲学は僕の頭を包含するにあまりあるものであるが、単に合わないというだけであつて、その頂戴した帽子は永久に保存する。このことは正直にいつていることで、新聞紙を帽子の中へ入れて、かむつて歩くことも寧ろ失礼である。合わないのは僕の頭が悪いのであるからその帽子を決して、なげするのではない。

僕をして詩（詩でないかも知れないが、詩と僕だけが思つたものを）大胆に書かした人は萩原朔太郎であつた。

愛弟子であつた三好達治さんの場合はもう少し入り組んだ関係がありますが、ここでは西脇さんの場合を取りあげるだけに

とどめておきましょう。

で、次に、三好さんではなく、三好さんの推薦で詩壇にデビューした谷川俊太郎さんを例に「語法」だけではなく、詩人の「人間性」や「倫理観」が、根源的な詩の決定的な違いを生む、ということを考えてみたいと思います。

朔太郎と俊太郎

ご存知のかたも多いと思いますが、谷川俊太郎さんは詩集『世間知らズ』で第一回目の「萩原朔太郎賞」を受賞しています。なんといつても「朔太郎」の名を冠した第一回目の受賞ですから、新聞などの報道も大きく、発行名義人であるわたしも「朔太郎↓俊太郎」という絶妙の組合せに心躍りしたものでした。ちょうど『戦後詩壇詩史』という本を書き出していたところでしたので、「序章 口語の詩から日常語の詩へ——萩原朔太郎から谷川俊太郎へ」を書き足して、その第一頁目に「朔太郎の名を冠した詩人賞の第一回目が谷川俊太郎に与えられた、ということ、はやや誇張した身振りをまじえたにしても、まさに「歴史的事件」といつていい。朔太郎が「近代詩」から「現代詩」への分水嶺を作ったとするならば、谷川は「現代詩」から、現代という括弧をとった「詩」への水路を開いた、といえるからだ」と次のように書きました。

またかつて

伊藤整が図式化したように、

日本の文学者

を「逃亡奴隸」

と「仮面紳士」

とに分けるな

らば、逃亡奴

隸型の朔太郎

タイプの詩人

のイメージを、

仮面紳士型の

詩人に仕立て

直したのは谷

川だった。谷

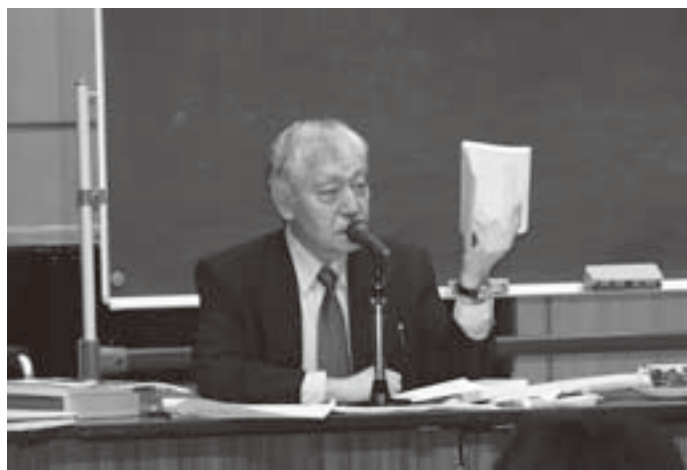
川自身、早くから、私は「破壊型」の詩人ではなく、「建設

型」の詩人になるのだ、という決意をる述べている。建

設型といういい方がなじめない古い文学者たちには、「調和

型」という文壇用語に置きかえて考えてもらえばいい。

谷川は受賞の挨拶で、「朔太郎さんがやろうとしてどうもうまくいかなかった現実生活と詩というものを、どうにか



して結びつけたい」と語った。朔太郎がもっていた生理的かつ病理的な詩の体質を、健康で倫理的な体質に移しかえた。

ここでは「朔太郎がもっていた生理的かつ病理的な詩の体質を、健康で倫理的な体質に移しかえた」と書いていますが、これは病理的な詩の体質を葬り去ったということではありません。「移しかえた」のではなく、「健康で病理的な体質の詩」も並び立つということを谷川さんは立証した、ということなんです。それは谷川さんの朔太郎とおのれとの差異を書いた「なつかしい一人の人格」を読むと、よく納得がゆきます。

萩原朔太郎の世界に溺れた記憶は、僕には無い。「月に吠える」や「青猫」の感覚的な側面には、僕は性格的に不感症だったし、「氷島」の一見剛毅な感傷は、それに惹かれば惹かれる程僕には危険なものにも思われた。朔太郎の「のすたるぢや」、それは僕にも解りすぎる程よく解った。だが同時に僕は、その「のすたるぢや」の不毛に一生を賭ける勇氣や愚かさや執念や潔癖をもたなかった。

先ずここでは朔太郎の「感受的な側面」が性格的におのれと合わない、朔太郎の感覚的感傷的な面に惹かれるのは「危険」

だと思われた、「のすたるぢや」の不毛に一生を賭ける「勇氣」や「愚かさ」や「執念」や「潔癖」を持たなかった、と実に「感情」抜きに朔太郎とおのれとの根本的な差異を分析しています。文壇用語でいえば、朔太郎のように「破滅型」ではなく、「調和型」たるゆえんでしょう。さらに明晰な谷川さんは、次のように朔太郎を解析してみせています。

だが、朔太郎にとつては、自らの感情の巨大さそのものが既に敵だったのかもしれない。一篇の詩を書くにも不足勝ちな、みみっちい感情しかもち得ない多くの自称詩人たちにくらべて、それは大変な贅沢ではあったが、同時にそれは実に怖しい呪いでもあったのではないか。朔太郎が遂に言葉にし得なかったもの、むしろそこにこそ、もつとさびしく、もつとさびしい朔太郎がいたに違いない。

この「実に怖しい呪い」を内包しているからこそ朔太郎の朔太郎らしきがある、という鋭い指摘は、朔太郎とは異質な人間性と感受性をもっている谷川さんだからこそより切実に察知することができたのでしょう。

このように戦後の詩人にとつての朔太郎体験は、飯島さんのように、「朔太郎とわれわれはかけはなれていない。自分の詩がいかに朔太郎が敷いたレールの上にあるかがわかる」と考える

タイプか、谷川さんのように、「朔太郎の感覚的な側面には、僕は性格的に不感症」だとしてその世界に「溺れまい」と遠ざかるか、この正反対の対し方に二分されるようです。だがまた、その異なった対し方を相手によってどちらかにきっぱりと強いるところにこそ、近代人の憂愁が渦巻く朔太郎の朔太郎らしさがあるのだ、といつてもいいでしょう。

しかし谷川さん風にいえば、朔太郎が終生かかえこんでいた「巨大な感情」の「実に怖い呪い」は、自身が好んで貯蔵しようとしたものであったのでしょうか。安らぎを求めても得られない疎外感、前近代的な土俗性からの反発、それゆえの環境からの脱走と自身からの逃走をくりかえすものの、遂に安住の地に行き着かなかった孤立感と絶望。その「近代的自我」のめざめと挫折は、死後六十五年後のこんにち、まだ過去のものとして葬り去られるものではない。なお生き生きと朔太郎の詩に凝集されていて、いまでもこの不毛な時代に生きるわたしたちの詩的精神を心底から揺すぶってやまないのです。

結びに——前橋関連の著者の本

これからがおもしろい話になるのですが、はじめにお断りしましたように体調が十分でないので、このへんでおしまいにさせていただきますたいと存じます。

最後に前橋にかかわりのある著者が書かれた本を二冊、紹介させていただきます。一冊はパラフィン紙にくるんであるの、こう手にかざしても見えないでしょうけれども『青春の萩原朔太郎——その詩と真実』。山田桂三著です。山田さんも前橋のかたです。四部構成で、そのうちの三部の部分は昭和三十四年から三年間にわたって、前橋の同人雑誌「ももんが」に発表されたものです。昭和三十四年は「現代詩手帖」が創刊された前後で非常に多忙だったのですが、同人雑誌を読むのが好きなので、その日の郵便物のなかに同人雑誌がはいっていると、仕事を終えてから夜を明かして読んだものです。そのなかで非常に興味を持ったのが山田さんの『青春の萩原朔太郎』でした。連載時は、「青春の……」ではなく、「萩原朔太郎年譜解」でした。つまり年譜を山田さんが独自の解釈で分析したものなのです。

ふつう年譜解といったら、朔太郎のそばにいるひとが故人ゆかりの場所をめぐって、あるいは近所のひととか幼なじみのひとたちに会って、あのときここに立小便をしたとか、ごはんをほおばった、おつゆをこぼしたなんていう、そんなことを書く年譜解というものがよくありますね。ところがこの本はそうじゃない。山田さんはこの原稿を書くために朔太郎と直接会って聞いたということは一度もないそうです。自分が朔太郎の年譜から感じとったことを内面的に追跡したものなのです。野口武久さんにお聞きしましたら、山田さんは哲学者ということでした。

その本がようやく何年か前に煥乎堂から出たのですが、五十年前、お近づきをえたばかりの伊藤信吉さんに「年譜解」のことを話したら、「わたしも注目して毎号読んでます。いいものですね。」とおつしやいました。伊藤さんの生前に、この本が間にあつていればよかったです。

それからもう一冊は渋谷国忠さんの『萩原朔太郎論』です。地元のかたなら朔太郎研究で有名なかたですので、ご存知かと思えます。これは思潮社から一九七一年に出た本です。この本の値打ちは徹頭徹尾、「前橋の一市民」という立脚点を忘れないで書かれていることです。「萩原朔太郎の『憤怒』」の章では、「前橋のわれわれは、たとえば東京の人が世界文学を読むようなぐあいに、単に世間の名詩名篇として朔太郎を読んだのでは足りない」とまで書いています。ことに「郷土望景詩」といわゆるその「憤怒」については、「前橋市民」として、「郷土前橋に立脚した受けとり方」をすべきだという考え方から、「望景詩の憤怒」を分析批評しています。渋谷さんでなければ摘出できない問題提起にあふれた貴重な朔太郎論です。

ついでにもう一冊、那珂太郎著『萩原朔太郎詩私解』を挙げます。はじめ角川書店の「近代文学鑑賞講座」の一冊として、のち単行本になりましたがいまは入手困難です。であるだけに、最良の朔太郎入門として苦勞しても読んでもらいたい本なんです。那珂さんは前橋の出身でも前橋に現在住んでいるわけでも

ありませんが、わたしは若いころ、この本を読むことで朔太郎の世界に深入りしてしまいました。朔太郎研究の原点とでもいべき本で、これで朔太郎の宇宙がぐつと身近に感じられるはずです。

この二冊プラス一冊の本を前橋の読者には特によく読んでらつて、前橋の地からこれからの朔太郎評価に新しい一石を投じてもらえたらと思います。

では、このへんで。体調が十分でなく、失礼いたしました。

＊本稿は講演録を起こしたものを小田氏に加筆・訂正していただいたものです。

小田 久郎（おだ きゅうろう）

思潮社代表

1931（昭和6）年東京生まれ。早稲田大学文学部卒。

1956（昭和31）年思潮社設立。

1959（昭和34）年詩誌「現代詩手帖」創刊。長年にわたって詩集および詩に関する本を刊行し、数多くの詩人を育てる。1991（平成3）年、「現代詩文庫」第1期100冊完結と長年にわたる詩書出版の業績により思潮社が第39回菊池寛賞を受賞。2001（平成13）年全詩集その他の本格的な出版活動に対して、梓会出版文化賞 特別賞を思潮社が受賞。

詩集に『十枚の地図』（1956年、書肆ユリイカ）。

著書『戦後詩壇私史』（1995年、新潮社）で第22回大佛次郎賞受賞。